

特 252

664

藤 上賢造先生序
本 正 高 著

主イエスと罪人たち

始



持 252
664

畔上賢造先生序
藤本正高著



主イエスと罪人たち

東京 阿佐ヶ谷聖書研究會



背ける子供らよ

我に歸れ

われ汝のそむきをいやさん。

(エレミヤ記三章二十二節)

序

藤本正高君は、若き獨立傳道者である。牧師としてその數年間の君のながき體驗は君をして萬難を排して獨立の荒野を選ぶに至らしめたのである。この一事を知る人は本書の精神の那邊に存するかを察知し得るであらう。此書もちろん小冊子であつて、福音の全般にわたりて説いたものではないが、しかし福音的芳味の全卷に溢れてゐるのを私は深く喜ぶものである。君いまだ青年にして、早くすでに福音の中心的生命に對する認識の正確なるものあるは、やはり時代の進歩を語るものとして、隔世の感なきを得ない。私は君の上に、更に順調なる進展のゆたかならんことを祈らずには居られない。又この小冊子が君の處女作として、それにふさはしき果を結ぶことを切に祈るものである。

昭和九年一月十一日空はれ渡れる日

畔上賢造記す

自序

獨立傳道の曠野に立つて二年餘になる。僅の間ではあるが、その間に種々なる事を經驗した。幾多の困難にも出逢ひ、飢餓の恐怖にも迫られた。併し主のみ手は常により近くあつた。願て全く感謝に堪へない。

されどまだ一步を踏み出したのみである。前途は遙かである。何處までこの旅路を進め得るか私には少しもわからない。たゞ最後の一息までこの福音の證のために進みたいと願つてゐる。

私はある彫刻家の話を思ひ出す。彼が一つの彫刻を完成した時には、身に纏ふに糸なく、食するに一物もなかつた。併し彼は歡喜に溢れながら、その完成した彫刻を抱いて、餓と寒さに息絶えたと云ふのである。私もそれに似た思ひをもつてこの小著を出版する。世の批評家には如何に映するか今の私には全く問題でない。たゞ一人の

貧しい靈にでも此の福音を證する事が出来れば幸である。

私の獨立傳道の門出に於て、種々指導と激勵を與へて下さつてゐる畔上賢造先生がこの小著のためにも序文を寄せて下さつた。全く感謝の到である。

又主は思はざる所に思はざる人を起して、この小さき者の働を助けしめ給うた。その方々にも深く感謝する。すべては主の恵である。出来得るなれば年に二回位このやうなものを出したいと願つてゐる。

昭和九年一月十二日夜

東京 阿佐ヶ谷にて

著 者

目 次

第一章	主イエスと私……………	一
第二章	主イエスとペテロ……………	九
第三章	主イエスとマタイ……………	一六
第四章	主イエスと罪ある女（その一）……………	二三
第五章	主イエスと罪ある女（その二）……………	三〇
第六章	主イエスと盲人……………	三六
第七章	主イエスと癩病人……………	四四
第八章	主イエスとザアカイ……………	五二
第九章	主イエスと死刑囚……………	五八
第十章	主イエスと人類……………	六三

主イエスと罪人たち

藤本正高

第一章 主イエスと私

——たゞ此のまゝにて——

たゞ此のまゝにて、一ことの申譯もせで

たゞ汝の血がわがために流されしにより

また我に來れど命じ給ふにより、

おゝ神の羔よ！ われは往く、われは往く！

たゞ此のまゝにて、一の黒き汚點けがれの

わが魂より取らるゝを待たで、

汝の血が凡ての汚點けがらを潔め得れば

おゝ神の羔よ！ われは往く、われは往く！

たゞ此のまゝにて

多くの悶えと多くのうたがひと

内と外の争ひと怖れとに苦めども、

おゝ神の羔よ！ われは往く、われは往く！

たゞ此のまゝにて、貧く、弱く、盲目にて、

視力、富、心のいやし等

凡てわが要するものを汝において見出すべく、

おゝ神の羔よ！ われは往く、われは往く！

たゞ此のまゝにて、汝はわれを受け、

歡びむかひ、赦し、潔め、救ひ給ふ。

汝の約束をわれ信するがゆゑに、

おゝ神の羔よ！ われは往く、われは往く！

これはシャーロット・エリオット女史の有名な「いさをなき我を」の讚美歌を、畔上賢造先生が原意のまゝ譯されたのであつて、私には忘るゝ事の出来ないものである。私が郷里の中學を卒業する數ヶ月前、或る事情のためその中學の宮崎と云ふ先生の宅に寄寓してゐた事がある。

或る朝、まだ薄暗い時、先生は内村鑑三先生主筆の「聖書の研究」に載つて居たこの歌を、幾度もくゞ聲を出して讀んでゐられたが、ついに私どもを集めて、「これだ

よ、これだよ、こんなに嬉しい事はない」と涙を流しながら読んで聞かされた。

私は先生が何故そんなに悦ばれるのか、さっぱりわからなかつた。病身であつた先生は其後間もなく、なくなられたが、その遺書の中には「このまゝ、神様のみ國へ往けるかと思ふと目が廻る程嬉しい」と云ふやうな事が書いてあつた。

私は基督信者になつて十年餘、この信仰がわからなかつた。矢張自己を頼り、自分の中にも善いものがあると思つてゐた。私の中にある愛、良心、それらを成長さしてゆけば神の要求し給ふものになり得ると思つてゐた。私は愛を増して下さい、信仰を増して下さい、と祈り求めた。併しその祈は空虚な山彦として反つて來るのみであつた。聲を大きくしてみても、力を入れてみても、その反響はより以上の寂しさを齎すのみであつた。祈つても祈つても迫つてくる罪の壓力、口で祈りつゝ耳に悪魔の囁きを聞くのであつた。主イエスは敵を愛せよと云はれる。私も敵を愛したいと願ひ時には又愛し得ると思つてゐた。併し靜かに考へてみると、たとへ言葉では愛すると云

つても、顔付、動作では愛を示し得ても、心の底に蟠る怒を如何ともする事が出来ないのであつた。

ついに私はある問題にぶつつかつて全く自分に愛のないのを知つた。今まであるやうに思つてゐた愛は自己中心の愛であつて、それは何時呪となり、嫉妬となるかも知れないものであつた。私の中にあるもので唯一つこれのみはと思つてゐた愛は最も醜惡なものである事を知つた。その愛をどんなに成長さしても、神の要求し給ふものになる所でなく、全くその根本を異にしてゐるものである事を知つた。そしてこの自己中心の愛をもつて神より與へられた基督者の愛の如く自任し、如何にも愛の深さうに装ふことは最大の偽善である事を知つた。「肉の望むところは御靈にさからひ、御靈の望むところは肉にさからひて互に相戻ればなり」(ガラテヤ書四・一七)「肉にしたがふ者は肉の事をおもひ、靈にしたがふ者は靈の事をおもふ。肉の念は死なり。靈の念は生命なり。平安なり。肉の念は神に逆ふ。」(ロマ書八・五、六)これらの言葉の眞

實の意味が始めて私にわかつた。それまで肉とは肉體的な慾望をさすのであると思つてゐたが、それは全くの誤解で、私ども人間の生れながらの一切のもの、私達が精神的とよぶものまでも、悉くをさすのである。我等の罪はたゞ單に肉體的慾望より來るといふやうな簡單なものでなく、より深刻に我等の存在の根本に根張つてゐるのである事を知つた。さうして私は今まで一生懸命に成長さゝんと培つてゐたものは、悉くこの肉から出たものであつた事を知り全く絶望のどん底に落ちた。「我はわが中、すなはち我が肉の中に善の宿らぬを知る、善を欲すること我にあれど、之を行ふことなればなり。わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の惡は之をなすなり」とパウロの呻きは又私の呻であつた。宛も死人の如くなつて、飲まず食はず、眠らずに一晝夜を悶え苦しんだ。

併しその時、主の十字架が新たに示された。今まで高い所にあると思つて仰いでゐた主の十字架は、私の下にあつて私を支へてゐるのである事を知つた。人を愛する事

も神を信すること、祈る事も出来ない人間であればこそ、主は私どもに代りて十字架にかゝり給うたのである。この我等の罪がその髓の髓まで根本的なものであればこそ、神の子御自身の贖ひが必要であつたのである。世界人類の中如何なる罪人よりも更に罪人として、主は十字架の上に神の詛を受け給うたのである。主の十字架はごんざいごんに墮ちてゐる人よりも、更にその下にある。主の十字架によつて贖ふことの出来ない程の罪人はこの世界には一人もゐない。我等にはよきものは何一つない。生れながら詛はるべき罪人である。この罪人に何の善がなされよう。何で人を愛せよう。あゝされどこの罪人にも神の愛は迫つてゐる。

アーメン有難い事である。主はこの罪人の心の戸の外に立ちて叩き給ふ。「視よ、われ戸の外に立ちて叩く、人もし我が聲を聞いて戸を開かば、我その内に入りて彼ごどもに食し、彼もまた我ごどもに食せん」。(黙示録三・二〇)と。この主をお受けする時、私ごどもの罪の詛はことごとく主が引受けて下さつて、私ごどもには彼の愛と義と平

安が與へられるのである。この恵を與へんがために「御靈言ひ難き歎をもて執成し給ふ」のである。この聖靈にありて新しく生れかほつてのみ、私どもは神の悦び給ふ愛をも與へられるのである。私はこの事を新に示されて再び立上る事が出来た。重い罪の荷の壓迫が消え去つて、新しい感謝が溢れてきた。暗い夜が去つて輝ける朝がきた。「たゞ此のまゝにて、凡てわが要するものを汝において見出すべく。おゝ神の慈よ！我は往く、われは往く！」が真に私のものとなつた。私は心より讚美と祈りを私の日の生活に於て捧げしめられるやうになつた。さうして再び聖書を開くと聖書はすべてこの福音を語つてゐるのであつた。その一語一語が生きて私に迫つてくる。以下私は聖書の中より數ヶ所を選んでこの福音を更に證したいと思ふものである。

第二章 主イエスとペテロ

(ルカ傳五・一—十二)

——我は罪ある者なり——

「聖なる湖」と云はれてゐたガリラヤの湖水に主イエスが姿を現し給うたのは、傳道開始後間もなくの事であつた。この湖の東岸は石灰石の山で峨々として二千呎の高さに聳えて居り、西岸は軽い傾斜の丘陵であつて棕櫚の木が鬱蒼と茂つて居た。肥沃なるゲネサレの平野はその西北に連り、四時雪を頂てゐるヘルモンの秀峰は遙北方に仰がれた。實にその風光は嚴肅、壯美、「聖なる湖」の名にふさはしいものであつた。この美しい湖水に主イエスは來り給うたのである。

靜かに眠れる湖を

抱ける山々の如何に麗はしき、

されど遙にまさりて美しきは

そのあたりを歩み給ひし主のみ足

とある詩人は歌つて居るが、實にこの美しき自然を背景に立ち給うた神の子イエスの

御姿は、例へやうなき壯肅なものであつた。

静に湖水にたちこめてゐた霧が動き出し、棕櫚の葉の露に朝日が輝き初めた頃、この湖水の畔は最も賑かな時であつた。一夜を湖上に明した漁夫達は威勢よく小舟を操りて歸り、商人はカペナウム、ベツサイダの町々より魚を買ひに群り、農夫は鋤を肩にこの邊りの道を一日の仕事へと急ぐのであつた。

この忙しい人々をぞらへて何事かを語り始めた人があつた。彼はいつたい何處の誰人であらうか、道ゆく人々は不思議に思つて近寄つて見た。その日焼た顔、彼等と同じ勞働に従事してゐたらしいその骨格、一見彼は矢張彼等の仲間と異ならない。されどよく見るとその輝ける瞳、優しき眦し、彼等はかくも麗しきものを、ヘルモン日の出にも、ガリラヤの満月にも見た事がなかつた。更にその口より逆り出る言葉は未だ人間の耳には語られたことのない權威あるものであつた。彼等は思はず網を棄て、鋤を下ろしてその話に聞き入るのであつた。この人は翌日も又その翌日も同じ頃同じ

所に立つて話をした。その評判を聞いてこの話をきくためにわざ／＼出かけてくる人も澤山あつた。かくて一日より二日へ、二日より三日へと聴衆は多くなるばかりであつた。

今日も次次にど多くの人が押かけてきて、彼は先程より少しづつ後すぎりしながら話してゐたが、もう後はすぐ湖水で一步も退かれなくなつた。困つて四邊を見廻すと幸すぐ近くの渚に二艘の舟が寄せてあつた。その漁夫は昨夜來用ひた網を洗つてゐる。その一人は知合ひのシモン、ペテロであつた。彼はこれ幸とペテロの舟に乗り、少し陸より押出さして舟の中より話を續けた。

かくてその話が終り、群集が語られた福音に悦と希望とを與へられて、或は家に或は働場に立去つた時、彼は側に座して居たペテロを顧て「深い處に舟を出し、網を下して漁れ」と言はれた。この言葉は何よりもペテロを驚かした。彼はこのガリラヤの湖水に生れて湖水に育つた漁夫である。魚の捕れる時と所については誰よりもよく知

つてゐる。終夜働いて漁のない時には翌朝になつてどんなに網を下しても魚の捕れない事は先祖代々からの経験であり、又その仲間達全部の経験でもあつた。然るにこの事には全く素人であるイエスが、玄人である彼にかく命じ給ふのである。大抵の者ならば鼻の先で「えへん、且那そんな事云つても駄目ですよ、この事についてちやわしや玄人ですよ」と一笑に付する所であるが、このペテロには疑ひつゝもなほその言葉に従ふ謙遜さがあつた。「君よ、われら終夜、勞したるに何をも得ざりき、然れど御言に隨ひて網を下さん」實に尊い「然れど」である。この然れどが彼の一生涯を信仰に導く契機となつたのである。我等の信仰に這入る動機もたいていこの然れどである。十分その理由はわからない、世間の習慣、常識にも反する、「然れどそのみ言に隨ひて」と云ふ事によつて信仰の第一階程に入るのである。

ペテロは疑ひつゝもなほ從順に網を下した、ところが彼の豫想は全く裏切られた。「敢て然せしに魚の夥多しき群を圍みて網裂けかかりたれば、他の一艘の舟にをる組

の者を差招きて來り助けしむ。來りて魚を二艘の舟に満したれば舟沈まんばかりになりぬ」と。彼は再び驚いた。而も今度の驚は先の驚以上に深刻なものであつた。彼の全身は慄ひ、目は眩んで何物も見えなくなつた。彼はたゞ平伏して「主よ我を去りたまへ、我は罪あるものなり」と叫ばざるを得なかつた。今までは一人の偉い宗教家位に思つて「君よ」などと呼んだのであるが、今こそはこの人の神の子である事を知つた。イエスの神の子である事を知ると同時に認めざるを得なかつたのは自己の罪である。人間の中に生活して人間のみを見てゐる時にはさほご自分を罪人であるとは思はなかつた。時には人よりも正直であるとか、親切であるとか自惚た事もあつたかも知れない、されど今神の子の前に立つてみるとまざ／＼と自己の心の醜惡さを認めぬわけにはゆかない。曇つた鏡の前には自己の顔の汚れも知らずに平氣で立つたものが、澄み切つた鏡を見せつけられて初めてその汚れに驚くやうなものである。視れば視る程自己の醜い姿、何で聖なる神の子の前に立ち得よう。あゝ神の罰を受くるにふさは

しいこの罪人、滅亡より他に行き處のない罪人、彼は全く絶望のどん底に落ちた。暗黒に馴れた目には太陽の光が目映くて目が開けられない。かつてダニエルも神を見て「我主よ我はこの示現に逢ひて畏怖にたえず、全く力失せて息も止らんばかりなり」(ダニエル十章十六節)と叫び、イザヤも「禍ひなるかな我亡びん、汚れたる唇の民の中に住みて汚れたる唇の者なるにわが眼萬軍のエホバにまします王を見まつればなり」と云つてゐる。あゝ誰か聖なる神の前に立つ事を得ようか。ペテロがかくも怖れ慄いたのも當然である。

ところが主イエスの口は靜かに又優しく開かれた「恐るな、なんぢ今より後人を漁らん」と。あゝ何たる言葉であるか。ペテロは三度驚いた。當然罰せらるべき罪人に「恐るな」と。「お前のその罪は私が責任を負うのだ、お前はもう赦るされるのだ」との意味が言外に含まれてゐる。而もそれのみではない。「その罪から赦された悦び、その感謝をもつて、お前と同様に罪の虜になつてゐる人々を神にまでつれ歸るのだ。そ

れは網を下して魚を捕るやうなもので中々の忍耐を要する、或る時は昨夜のやうに終夜働いても一匹も捕れないと云ふ風でどんなに努力しても一人も悔改めないかもしれない。併しその時もお前が長年漁師で鍛へ上た忍耐力をもつて、「更にもう一度」やつてみる事だ。而もその忍耐はお前が罪より赦された感謝にあふれるならばわけなく出来る事だ。私がお前の所に来てお前の舟にのり、その職業を通して神の力の偉大さと人間の常識、經驗の頼りにならざる事を知らし、又同時にお前自身が如何に罪深いかを知らしめたのは、お前を傳道者として選ぶためであつた。自己の罪を知り絶望のどん底に落ち、神の憐み以外救はるべき望のない事を知つたものでなくては此の福音を人に傳へる資格がないのだ。目を上げて見よ、如何に多くの人々がその罪さへも悟り得ずして右往左往してゐるかを。彼等の中一人の亡ぶるをも父なる神は欲し給はない。彼等が悔改めて歸る日を今日か明日かと放蕩息子の親が子を待つ如く待つてゐられるのだ」主イエスの目はペテロに向つてかく語つてゐた。ペテロはたゞもうこみ

上てくる感謝で一ばいである。云ふべき言葉さへもない。長年住み馴れた家も、家族の者等も、生命よりも大切な位に思つてゐた舟も網も、今は何の未練もない。この罪より救はれた感謝の中に、この光榮ある使命の前に、それ等を棄てる事が何であらう彼の罪の恐怖が深刻であつただけその赦された喜びも大きく、犠牲のギの字も考へずにこれら一切のものを棄て得たのである。たゞ彼に従ふがために！ 然り、たゞ彼主イエス・キリストに従ふがためのみに！

第三章 主イエスとマタイ

(マタイ傳九・九一—一三
マルコ傳二・一三—一七
ルカ傳五・二七—三二)

— 罪人を招かんとて来り —

ヨルダン川の畔りで、救主来れりと叫んだバプテスマのヨハネの聲は、次から次へと村々に響き渡り、種々なる人々の心に種々なる反響を呼起した。それは或る人々には喜びの音づれであり又或る人々には恐怖の音づれであつた。人生の重荷に苦しみ、境

遇の壓迫に呻いてゐた人々にとつてこの叫びは如何に大なる慰めを與へた事であらうか。

マタイは親譲りかどうか分らないが、とにかく取税人と云ふ、人々から蛇の如く嫌はれる仕事をして居た。當時ユダヤの國はローマの屬國であつて、その搾り取つた税金は悉くローマに持つてゆかれるのであつた。そのローマの官權の手先となつて、同胞より税金を取り上げる役をしてゐた取税人は、賣國奴として人々より嫌はれた。特に彼等の多くは金さへ得ればどんなに人々から憎まれてもよいと云ふ連中であつて、出来るだけ多くの金をその同胞より取り上げて、その一部を自分の懐に振込むやうな事さへしてゐたのである。それでユダヤ人はこの取税人を鬼と呼び犬と呼び、どんな人が神に救はれても、彼等のみは救はれないと極めてゐた。マタイもこんな職業についてゐたので決して立派な人間であつたとは思はれない。彼も矢張「何と云つても世の中は金だ」と人々より搾取したもので私腹を肥してゐたのであらう。併し彼も矢張人

間である。彼にも影の如くおそつてくるものがあつた。その影は「それでよいのか、金さへあればお前は幸福なのか、それで眞の平安があるのか」と囁いた。彼はその影を拂ひのけやうとするが退かない、ます／＼強く迫つてくる。こんな商賣を廢めて眞面目な人間として働かうとしてもその勇氣がない、人はもう信用しない。彼は毎日、時には自暴自棄になり、時には絶望のどん底に沈んだ日を繰返してゐたのである。

その時「救主が來られた」と云ふ聲が、彼の收税所にも聞えてきた。彼は今更ながら自己の罪の恐ろしさに戦きながら、又此んな者でも救つて下さるのだらうかとの一縷の望をもつて、今日はあの村でこんな話をなさつたとか、こんな病を癒されたとか云ふ噂を毎日聞いてゐたのである。ところが或る日、その噂の人主イエスが彼の收税所の前を通り給うた。彼はわく／＼する胸を押へながら何事も忘れて主の御姿に見取れてゐた。所が思ひがけなく主は彼の方を振り向きて「我に従へ」と仰せ給うた。

あゝそのみ聲、何事をも心の奥底まで知りつくし、それでもよいからたゞ従へど、優

しく而も力強く……。彼は長らく此の聲を待つてゐたのである。今まで彼を罵倒した人は幾人かあつた。彼のしてゐる事が悪いと忠告して呉れた者もあつた。されど我に従へど云つてくれたものはなかつた。悪いことは人に教へられなくともよく分つてゐる。しかしどんなにすればその悪いものから離れられるか、それが問題なのである。あゝ併し何でもよいたゞ我に従へど、これ程有難い事はない。「君生れ變つて眞面目な生業につき給へ」とか「そんな事は大きな罪だよ、聖書には食ふなかれと書いてあるとか、主イエスは仰せられなかつた。たゞついて來い、お前の罪も、弱さも、私にはよくわかつてゐる。それだからこそ私についてこい、私はお前に必要などんなものでも——罪を悔改める力も、新しく生れ變る力も——ことごとく與へることが出来るのだ。主イエスの簡単な「我に従へ」との御言葉の中には、この意味が含まれてゐる。

何たる感謝であるか、マタイが此の御言葉に接した瞬間、長い間彼をこの職業に繋

いでゐた罪の絆は切斷された。自らの力にはどうにもならず、夜に日に魔まされてゐたこの絆が、今は何の努力もなく斷られたのである。彼は悦びのあまり、出來得るなれば自分と同じく罪の生活をしてゐる友等にもこの恵を傳へたいと感謝會を開いた。主も又その座に招かれ給うた。主は何の蟠りもなく悦んでこの罪人として世間より爪弾きされてゐる人々の席に來り給うた。所が承知しないのはパリサイ人である。彼等は自ら信仰の深きをもつて任じ、世界人類の中最初に救はるべきものであると思つてゐた。彼等の最も嫌ふべきものとしてこの取税人の如きはない。その取税人どもに主が食事し給ふのである。彼等は訝りつゝ主の弟子に向つて「なに故なんぢらの師は、取税人、罪人らと共に食するか」と非難した。主はそれを聞いて「健かなる者は醫者を要せず、たゞ病める者これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり」と云ひ給うた。あゝ何たる意味深い言葉であらうか。私の此の世に遣された目的はかゝる罪人を招くためである。悔改の必要な九十九人の正しき者よりも

(そんな者は一人もない筈だが)悔改むる一人の罪人の爲に私は來たのである。君達の如く、自ら信仰深いと任じてゐる人には私は用はない。君達のよく知つてゐる舊約聖書にも「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」とあるではないか。どんな宗教的な捧げ物をなしても、儀式を守つても、碎けたる悔ひし心がなければ駄目である。この君達から罪人と云はれてゐる人々は慥に罪人である。この人達は、「罪人なる我を憐み給へ」と平伏して顔も上げ得ない人々である。君達の様に聖書もよく知らない。教會にもよく出席しない。献金もしない。けれども、けれども、この人達には碎けたる心がある。自らの力では正しくなり得ないと謙遜に跪くその碎けたる心こそは神の最も悦び給ふものである。私も又かゝる人のために遣されたのである。この主イエスの御言葉をマタイはたゞ感涙に咽びながら聞いた事であらう。

其後マタイは主イエスに従つて如何なる事をなしたか彼自身も沈黙し、他の福音書記者も書いてゐない。(私が福音書を讀む度に教へられる事は、弟子達が自分達の働

二二二

について全く黙してゐる事である。偶々筆が弟子達に及ぶ時は、いつも失敗して主より叱られた記事である。こんな缺點のある者等をも主はかく憐み給うたと、主の恵を證するのが彼等の主眼である。實際彼等は主の前に誇るべき何物もなかつた事をよく知つてゐた。たゞ崇めるのは主のみ榮えのみである。今日ともすると或る種の傳道者は、自己の働を宣傳したり、ある人物を宣揚したりするがそれとは全く正反對である。併し必ずや彼はその全生涯を通して、自分のやうな罪人さへこんなに救はれましたとこの福音を同胞に傳へるために山河を馳せ廻つた事であらう。さうして更にこの福音を後世に傳へるために筆をとつて書いたのが、かのマタイ傳である。實に驚くべき事である。偉人の傳記は偉人が書かねばならぬとされてゐる、然るに此の神の子の傳記は人より塵芥の如く嫌はれてゐた取税人の手になつたのである。而も此の書は彼と同様に世から棄てられてゐた人々を如何に多く新に生れ變らしめた事であらうか。セキスピアのものもカントのものも讀まれるのは一時である。されどこの罪人マタイの手

になれるマタイ傳は、人類への神の書として永久に世の光となるのである。

第四章 主イエスと罪ある女 その一 (ルカ傳七三六―五〇)

— なんぢの罪は赦されたり —

主イエスは如何なる人にも少しの僻見を持ち給はなかつた。世から罪人として爪弾きされてゐる人々が主を招いた時に喜んでこれに應じられた如く、パリサイ人の招きにも應じ給うた。彼は人をその階級、職業、宗派などで見給はずして、直接その自身を見られた。少しでも眞面目な氣持をもつて彼を招くのであれば、たとへその人が彼を最も悪んだパリサイ派に屬してゐても、彼は喜んでそれに應じられた。彼等も救はれねばならない人達である。否彼等こそ、拒絶さへしなければ最も福音を聽かせねばならない人達である。

今日もシモンといふパリサイ人の宅に招かれて食事を共にせられた。ところがそこ

に全く思ひがけない事が起つた。

「視よ、この町に罪ある一人の女あり。イエスのパリサイ人の家にて食事の席に給ふを知り、香油の入りたる石膏の壺を持ちきたり」「視よ」に非常に思ひがけない驚いた氣持があらはれてゐる。實に思ひがけない事であつた。誰一人知らぬものゝない此の町での評判の罪ある女（多分賣笑婦であつたであらう）が、所もあらうに、かゝる人を最も忌み嫌つてゐるパリサイ人の邸宅に這入つてきたのである。乞食がひよつこり王宮に現はれたやうなものである。それだけ彼女がこゝに來るには大なる勇氣が要つたに違ひない。普通ならば決して出來ない事である。何が彼女をかくさしたのであらうか。彼女は評判の罪人であつた。併し彼女にも靈はある。神に造られた時の人間の面影はなほ残つてゐる。彼女にも矢張義を求め、神に憧れるものが心の奥深く秘んでゐた。いくら自暴自棄になつたつもりでも、いくら自らを悪人と極めてしまつてゐても、なほ彼女の中にはさうなりきれないものがあつた。寧ろ彼女には、上手に誤魔

化してゐる所謂善人よりも、より深刻な神への憧れがあつたのである。その彼女が、救ひ主イエスを知つたのである。彼女はもう何もかも忘れて、鐵粉が磁石に引き着けられる如く、暗夜に迷つてゐた鳥が光に引き寄せられる如く、主イエスの所に來たのである。

主イエスはその時、ユダヤの習慣に従つて足を投げ出して座してゐ給うた。彼女はそのみ足の所に跪いてもう其處に他の人々——冷めたい目を光らしてゐるパリサイ人、のゐる事も何も忘れて、たゞ泣き伏したのである。冷酷な世間に對して堅く閉ざしてゐた彼女の心は、太陽の熱に溶ける氷の如くに一時に溶け崩れて、泣けて泣けて仕方がなかつた。その涙で主のみ足をうるほし、女にとつて最も大切な髪をもつて之を拭ひ、又尊敬のあまり御足に接吻して、更に香油を御足にそゝいだ。あゝ實に彼女の如く泣ける者は幸である。彼女は一言も發してゐない。私がかくなりましたのは世間が悪かつたのですとか、境遇が悪かつたのですとか、一言も辯明してゐない。彼女

も云はんと欲すれば澤山その理由はあつたに違ひない。併し今の彼女にはそんな事は問題でない。又彼女は所謂、信仰告白とやらもしてゐない。眞の罪の悔改には、そんな事が雄辯にしゃべれるものではない。たゞ泣けて泣けて、泣くよりほかに言葉がなかつたのである。

この泣き崩れてゐる女と、それを批判的に見てゐるパリサイ人と實に著しい對照である。彼等パリサイ人は、「此の人がもし、我等の待ち望んでゐる預言者ならば、今彼に觸るゝ者の誰であるか、如何なる女であるかを知る筈である。彼女は有名な罪人であるのに」と心のうちに云つた。彼等は此の女の氣持がわからぬのみでなく、それによつて主を疑つたのである。(もとより主を信じてゐたのではない、或は預言者かも知れぬ位に思つてゐたのであらう)彼は矢張パリサイ根性を離れ得ない。この罪ある女と、神より來る預言者とは全く氷炭相容れざるものであると思つてゐた。神より來るものならば、彼女の罪人なるを知つてこれを遠ざける筈であると思つた。これ自己

の罪を知らずして他の罪のみを審く偽善者の特徴である。あゝ自己の罪深きを知るものは誰かこの罪を赦す愛の神を求めずにはゐられようか。

主は彼の云はんとする所を知りて云ひ給うた。

「或る債主に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の負債せしに、償ひかたなければ、債主この二人を共に免せり。されば二人のうち債主を愛すること孰が多き」

實に適切なたとへである。我等の罪は借金のやうなものである。而も自らの力で到底拂ひ得ない、又同じ人間では誰も代つて拂ふ事の出來ない借金である。人は誰も彼もみなこの借金をもつてゐて他人の借金を拂ふどころではない。たゞ無限の富を持ち給ふ主イエスが、惜しみなく、信するものに代つて拂つて下さるが故にのみ我等は罪の借金より免さるのである。さうしてこの罪の借金は神の目より見た時誰も五十歩百歩である。たゞそれを深く感ずるか感じないかの相違である。それを深く感じて如

何にしてそれを支拂はんかと苦しんでゐた者は、それをあまり感せず、或は自ら誤魔化して知らぬ顔してゐたもの以上に、その免さるる事の感謝である事は當然である。主はごうにかしてパリサイ人にこの福音を知らしめたいと思つてかくたどへをもつて語り給うたのである。

シモン答へて言ふ「われ思ふに、多く免されたる者ならん」イエス云ひ給ふ「汝の判断は當れり」その通りだ、それがわかつて何故このことが、この女が何故かく悦ぶか、又私が何故かゝる罪人に喜ばれるかわからないのか。

斯て女の方に振向きてシモンに言ひ給ふ「この女を見るか、我なんちの家に入りしになんちは我に足の水を與へず、(ユダヤでは革草履をはいて歩いてゐたゝめ家に入る時に足を洗つてゐた)此の女は我が入りし時より、我が足を濡し、頭髮にて拭へり。なんちは我に接吻せず(家に客を迎へた時尊敬のしるしに接吻してゐた)此の女は我が足に接吻して止まず、なんちは我が頭に油を抹らず(これも客を持成す爲にな

してゐた、こゝに油とあるは普通用ひる安價なものである)此の女は我が足に香油(滅多に用ひない高價なるもの)を抹れり」何故汝と此の女とはかく違ふのであらうか。

「この女は多くの罪が赦るされたためにその愛することも多いのである」(日本譯に「この女の多くの罪は赦されたり、その愛すること大なればなり」とあつて愛すること大なるため赦るされたとの意味にとつてゐるが、これは前のやうに譯すべきだと思ふ)「されど赦さるゝ事の少き者はその愛する事もまた少し」。こゝが汝と此の女と相違する點である。さうして主は女に向つて改めて「汝の罪は赦るされたり」と云ひ給うた。

ところが主の一語一語に躓いてゐたパリサイ人はまだ目が開けない。「罪をも赦すこの人は誰なるか」と心の内に云つてゐる。實に禍なる彼等である。主が神の子であることがわからないから、その一言一動作にも躓くのは當然である。而も主の神の子であることは、自己の罪を知つたものみに、神より示されるのである。主は一方に彼等に答へつゝ、その女に言ひ給うた。「なんちの信仰、なんちを救へり、安らかに

往け」實に有難い言葉である。救はるゝものは主を招いた義人パリサイ人でなく、こつそり這入つて来た札附の罪人である。彼女は如何に感謝と平安にあふれつゝ歸つていつた事であらうか。

第五章 主イエスと罪ある女 その二（ヨハネ傳八・一一一）

——我も汝を罪せじ——

秋も半を過ぎ、ユダヤ人の大祭日の一つである假廬の祭も愈々最後の日となつた。主イエスはこの祭の間、エルサレムの宮に於て、全国より集つてくる人々に福音を語り給うたのであるが、その最後の日には「人もし渴かば我に來りて飲め、我を信する者は聖書に云へることく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし」との大真理を語り給うた。このみ言は人々に大いなる衝動を與へ、或る者はその力に打たれて「これ眞の預言者なり」「これキリストなり」と云ひ、又或る者は反感をもつて「キリ

スト争でガリラヤより出でんや」と叫んだ、かくて群集の中には騒然たる争ひが始つた。しかし主はそれをよそにオリブ山に登り給うた。このオリブ山こそは彼の祈の場所であつて、迫つても迫つても拒む人々の頑な心に、堪へ難い痛みを覺へ給うた主は、この大自然の中に於ける父なる神との交りに於てのみ、新たな力を與へられたのである。

今日も一夜をこの山中に祈り明し、曉の白みかけた頃再び宮に入り給うた。連日主のみ言に心惹かれてゐた人々は、主の姿を見るなり今日も亦何か教を受けんものゝ集つて來た。主は徐ろに坐して語り始め給うた。ところが急に騒がしい人聲が起つた。何事かと目をやると、そこには一人の色青ざめた女が、數人の學者やパリサイ人に引き立てられて來てゐる。彌次馬はそれを圍んでワイ／＼騒いでゐる。やがて彼等は、その女を主イエスの前に突き出して、いとも誇りやかに「師よ、この女は姦淫のをり、そのまゝ捕へられたるなり、モーセは律法に斯る者を石にて撃つべき事を我らに命じ

たるが、汝は如何に云ふか」と詰めよつた。

あゝ何と意地悪き人々よ、人民の指導者、専門的宗教家をもつて自ら任じてゐた彼等が、一人の野人イエスが出現して、特にこの度の假廬の祭に於て、多くの人々の心を收攬し給うたのを嫉み、如何にしてか人々の前に彼を辱かしめんと思ひめぐらしてゐたのであるが、今こそは最もよい材料を手に入れたのである。「石で撃て」と云へば今まで彼の説いた愛の福音を裏切るものであり、「撃つな」と云へば、彼等ユダヤ人が神の誠として何よりも尊んでゐるモーゼの律法を破ることである。(レビ記二〇章一〇、シンメイ記二二章二二) いづれを答へても群集は承知しない筈である。學者パリサイ人は勝利の笑を浮べてゐる。主イエスは如何に答へ給うであらうか、群集も學者パリサイ人も固唾を呑んで返答を待つてゐる。

然るに主イエスは一言も答へず、悲しげな面もちをしながら、靜かに身を屈めて地に何事かを書き給うた。何を書き給うたのであらうか、誰も知る事は出来ない。たゞ

主は邪惡なる人々の心を、痛ましく思ひつゝ誰人に訴へるよしもなく大地に訴へ給うたのであらう。その周圍に立てる誰よりも、より深くこの大地は主に親しいものであつた。罪を犯した女あると聞いて如何に彼は悲しみ給うたであらうか、自分の娘の墮落を悲しむ親以上に彼はこの女の罪を歎き給うたのである。されどそれにもまして彼の心を痛めたのは、その女の罪を好材料として、今イエスに返答を迫つてゐる學者パリサイ人の態度である。おゝお前等は誤魔化してはならない。人の罪のみを摘發して自ら義人と思つてゐるのか。聖書をよく知つてゐるからと云つて、宗教家の衣を身に纏つてゐるからと云つて、自らの罪を隠し得てゐると思つてゐるのか。この審かれる女にもまして汝等が神の前に罪ありとされてゐることを知らないのか。と主は悲しみ給うたのである。

ところがこのイエスのみ心は彼等學者パリサイ人には分らない。答へ給はないのを返答に窮したからだと思つて、益々誇らしげに答を迫るのである。あまりにしつこく

聞くので主は身を起して、嚴かに答へ給うた「なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て」石で撃ち殺したいと云ふのか、それならさうするがよい、但し汝等のうち罪なき者のみが。モーゼの律法をもつて人を審き得る資格のあるものは、その一點一畫をも犯した事のないものでなければならぬ。そんな者が汝等の中にあるならこの女を審くがよい。かく云ひ放つて主イエスは再び身を屈めて地に何事かを書き続け給うた。

何といふ明快な又徹底せる答辯であらうか。偽善者は相手が弱いとみた時には如何にも偉さうに威張るが、權威ある真理の言葉には一たまりもなく參つてしまふのである。老人をはじめ若き者まで、こそ／＼とその場より逃れ去つた。さうしてイエスの前には如何になりゆくかと立ち竦んでゐる女のみが残つた。主イエスは靜に身を起し「をんなよ、汝を訴へたる者どもは何處にをるぞ、汝を罪する者なきか」と優しく語り給うた。彼女は其の言葉にやつと我にかへり、「主よ誰もなし」と答へた。彼女の唇より「主」と云ふ言葉が發せられた。學者やパリサイ人の如き立派？なる人々に

は分らなかつた主が、この罪の**どん底**にあつて全く絶望せる女には不思議にもよくわかつたのである。

されどこの婦人にとつて、主と知ることには如何に怖ろしい事であつたであらうか。先の偉さうな人々は誰一人自分を罰する資格がないとしても、この方だけは審く資格をもち給うのである。彼女は前とは別の而もより深刻なる恐れを感じたであらう。ところが主は再び云ひ給うた。「われも汝を罪せじ、往けこの後再び罪を犯すなかれ」何といふ憐れにみちた言葉であらう。如何なる人をも審く資格を持ち給ふ主が、その資格を放棄して、「我も」と云つて自ら罪人と同じ立場になり給うたのである。私は今人を審くために來たのではない、その罪を私が負うて私が罪人になるために來たのである。お前の罪の罰は私が引き受けよう。私がお前に代つて石で撃ち殺されよう。お前が律法を犯したための神の詛を私が受けよう。そのために私は來たのだ。されど／＼この恵を蔑みして、再び罪を犯してはならない。幾ら罪を犯しても私が引き受け

るからと云つて、殊更に罪を犯すやうな不心得をしてはならない。あゝ何と情け深い言葉であらうか。この女はたゞ嬉し泣きに泣くのみであつたであらう。されどそれにもまして主は、かゝる人の罪のために泣き給うたであらう。

第六章 主イエスと盲人 (ヨハネ傳九章)

——もし盲目なりしならば、罪なかりしならん——

或る日主イエスは、エルサレムの門の傍で、生れつきの盲人である乞食を見給うた。このユダヤの國では、かゝる不遇な人を、何かの罪のために神の罰を受けたものであると考へて、排斥してゐた。彼もその家族や世間から棄てられて、その日／＼を人人から投げ與へられる食物によつて、やつと生命をつないでゐたのである。實に此の世に彼の如く不幸なものは稀である。主の弟子達はその盲人をみて「この人の盲目にて生れしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか」と尋ねた。彼等も當時のユダヤ思想に

支配されてゐてかく考へたのである。ところが主は答へて「この人の罪にも親の罪にもあらず、たゞ彼の上に神の業の顯れん爲なり」と云ひ給うた。實にこれはユダヤ人にどつては驚くべき言葉である。種々なる不幸は神が罪に對する罰として與へられるのでなく、その不幸を通して神の業、神の榮光が現はれるのであると云はれたのである。神は曾てイスラエル民族をエジプトから救はんとするにあたり、先づ極度の苦難に置き給うた。(出エジプト五章)その如く私どもにも特別な恵を與へる前に、最も酷い逆境に落し給ふことがある。これ全く自己の無力を知らしめて、救を神のみに求めしめんがためである。私は盲人であつたが故に、不治の病人であつたが故に、又種々なる逆境にあつたが故に、普通の人よりも眞剣に神を求め、その信仰をもつて神の榮光を現してゐる幾多の人を知つてゐる。實に彼等の不遇は神の業があらはれるためであつたのである。

かくて主は唾にて泥をねり、この盲人の目にぬりて「ゆきてシロアムの池にて洗

へ」と云ひ給うた。これ彼自身に信仰を興へて癒さんが爲である。普通の者ならそんな事を云はれても信じないかもしれないが、この盲人にとつては何よりの福音である。彼は少しの疑ももたず、従順にその言葉に従つた。その結果彼の生れつきの盲目は開かれた。彼はどんなに喜んだであらうか。彼は踊り上りつゝ此の恵を感謝したのであらう。

ところが驚いたのは、この盲人が毎日物を乞つてゐたのを知つてゐた人々である。「この人は坐して物乞ひゐるにあらすや」或人は「夫なり」といひ、或人は「似たるなり」といふ。ところがその本人は「我はそれなり」と濟ましてゐる。彼等はそれを認めぬわけにはゆかない。そこで次に問題となつたのは、この盲人を癒す事の出来た人は如何なる人であるか、と云ふことである。彼等は色々議論してみたが納らない。そこで彼等はその男を連れて、人民の指導者、専門的宗教家であるパリサイ人の所にきた。ところがその事を聞いて、今度はパリサイ人の間に争ひが起つた。「パリサイ

人の中なる或人は「かの人、安息日を守らぬ故に、神より出でし者にあらす」と言ひ、或人は「罪ある人いかで斯る徴をなし得んや」と言ひて互に相争ひたり」誠に御苦勞な話である。主がこの盲人を癒されたのが丁度安息日であつたので、この男をめぐつて大先生達がかゝる大議論を始めたのである。神學的論争の多くもこの類である。はつきりした救の體驗を興へられたものには實に馬鹿げた議論である。彼等はこの男に「なんちの目をあけしに因り、汝は彼に就きて如何にいふか」と問ねた。彼は答へて「預言者なり」と云ふ。ところがそれでも満足しない彼等は今度はその兩親を呼び出して、「これは盲目にて生れしと言ふ汝らの子なりや、然らば今いかにして見ゆるかと尋ねた。實に念の入つたことである。ところがその兩親の答へがふるつてゐる。「かれの我が子なること、盲目にて生れたる事を知る。されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に問へ、年長けたれば自ら己がことを語らん」兩親のかく言ひしはユダヤ人を懼れたるなり。ユダヤ人ら

相議りて『若しイエスをキリスト(救主)と言ひ顯す者あらば除名すべし』と定めたるに因る」とある。除名とはユダヤ人の間に於て、初めに三十日間交りを絶ち、それでもきかぬ時は更に三十日を追加し、なほきかぬ時は永久に追放して癩病人と同様に取扱ふ事であつたさうである。この兩親はそのためイエスの名に觸れずに要領よく答へたのである。パリサイ人らが去つた後べろりと舌位出したかもしれない。

そこでこの大先生達は再び先の男を呼びて「神に榮光を歸せよ、我等はかの人(イエス)の罪人なるを知る」と云ふ。「神に榮光を歸せよ」と誠に云ふことだけは立派である。されどその實は自己に榮光を歸してもらひたいのである。彼答へて云ふ「かれ罪人なるか、我は知らず、たゞ一つの事をしる、即ち我さきに盲目なりしが、今見ゆることを得是なり」この事だけは誰が何と云つても覆ふ事の出来ない事實である。この體驗に基く確信の前にさすがのパリサイ人もたぢろいでゐる。彼等は云ふべき文句につまり思はずつい先に尋ねた事を繰返して「かれは汝に何をなし、か、如何にし

て目をあけしか」と問ふ。彼答ふ「われ既に汝らに告げたれど聴かざりき、何ぞまた聴かんとするか。汝らもその弟子とならんとするか」と。一問一答ごとにパリサイ人の言葉は亂れるに反して、この男の言葉は益々確信を得て鋭くなつてゐる。さうしてついに「そんなに熱心に聞くのは貴殿達も彼の弟子になるためですか」と擲擻つてゐる。彼等はそれを聞いて怒りながら「なんぢは其の弟子なり、我等はモーゼの弟子なり。モーゼに神の語り給ひしことを知れど、此の人の何處よりかを知らず」と云ふ。彼はこれに答へて愈々最後の止めを刺して云ふ「その何處よりかを知らずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。神は罪人に聴き給はねど、敬虔にして御意をおこなふ人に聴き給ふことを我らは知る。世の太初より、盲目にて生れし者の目あけし人あるを聞きし事なし、かの人もし神より出でずば、何事をも爲し得ざらん」と。實に面白い問答である。どちらが専門的宗教家で、どちらが乞食であつた男かわからない。全く位置顛倒した。目を開かれたと云ふ事實の體驗の前に、雄辯學を修めてゐる學者の

議論も齒が立たない説き伏せやうとして反つて説き伏せられてゐる、實に信仰は單なる知識でなく體驗である。今日の多くの基督信者に眞の力と生命のないのは、この體驗に基づかずして、單なる學說、主義、思想に基づいてゐるからである。言葉に窮したパリサイ人等は「なんぢ全く罪のうちに生れながら、我らを教ふるか」と云つて彼を追放した。道理に敗れて權力に訴ふ、これ信仰なき偽善者の常套手段である。

そこで主はこの追放された男に同情して彼に逢ひ、次の問答をなし給うた。「なんぢの子を信するか」答へて云ふ「主よ、それは誰なる乎、われ信せまほし」イエス言ひ給ふ「なんぢ彼を見たり、汝と語る者は夫なり」爰に、かれ「主よ、我は信ず」といひて拜せり。實に簡單明瞭である。パリサイ人が如何にもして主を否まんとしてあらゆる努力をしながら反つて醜態を演じてゐるのに對して、この男の主を受け入れるに何と單純容易なる。實にある場合には主を疑ふより信する方が易いのである。ただ事實を事實として虚心坦懐に受け入れればよいのである。この男は世にも憐むべき

盲人の乞食であつた。文字も知らない聖書も知らない。されど彼は主と聞いて直に拜してゐる。

そこで「イエス言ひ給ふ『われ審判のために世に來れり、見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん爲なり』と。私が此の世に來た事によつて審判の線は引かれた。さうして人類は二分された。その線の彼方と此方に、靈の目開きと盲目に。而もそれは自ら見ゆると思つてゐるものが盲目になり、盲目と思つてゐたものが目開きになるのだ。靈的眞理は此の世の常識と反する。學識廣きパリサイ人が盲目になつて、この盲人が目開きになつたのだ。

「パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言ふ『我らも盲目なるか』イエス言ひ給ふ『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん、然れど見ゆると言ふ汝らの罪は遺れり』と。實にその通りである。今一人の盲人の目が開かれたのは一つの具體的見本に過ぎない。要は靈の問題である。靈の目が開かれて神を眞實に信すること

が出来るかどうか、これもつとも重大な問題である。神につき信仰につき何にもわかないと謙遜に跪く人には反つてわからされ、自ら何でもわかつてゐると傲慢に誇るものにはわからされない。これ信仰は心の貧しきものに與へられる神の啓示によるからである。

「なんぢ、我は富めり豊なり、乏しき所なしと言ひて、己が惱める者、憐むべき者貧しき者、盲目なる者、裸なる者たるを知らざれば、我なんぢに勸む、なんぢ我より火にて煉りたる金（永遠の生命）を買ひて富め、白き衣（神より與へられる信仰による義）を買ひて身に纏ひ、なんぢの裸體の恥を露さざれ、眼藥（聖靈）を買ひて汝の目に塗り、見ることを得よ」（ヨハネ黙示録三・一六—一七）

第七章 主イエスと癩病人（ルカ傳一七・一一—一九）

—なんぢの信仰汝を救へり—

神を讚美せしめられる事は我等の信仰の極致である。されば如何なる人々にこの讚美が與へられるのであらうか。主イエス御在世當時は此の世的に信仰の立派な人達が澤山ゐた。ヨセファスと云ふ當時の歴史家は、パリサイ人と呼ばれて宗教的に人々から崇められてゐた人々が六千人ゐたといつてゐる。彼等はよく教會に出席する。十分の一の獻金もする、斷食もする祈もする、聖書（舊約）と云へばよくこれを暗誦してゐて、何時でもそれを引いて人を教へる事が出来た。或人は死なんとする時友人を呼んで自分がまだこの聖書に書てある事で行つてゐない事があれば教へてくれ、私はそれを爲して死なうと云つたさうである。それ程彼等は聖書の言葉をよく實行しやうと務めた。今日の教會の模範的信者と云はれてゐる人々も、まだ足下にも寄れぬ程、彼等は徹底してゐた。

神の子イエスが此の世に來り給うた時、第一に彼を迎へて讚美する人々は、この信仰深い？ 人々を除いて他にない如く思はれた。然るに事實は全く正反對で、彼等は

神の子を讃美するどころか、かへつて讃美するものを叱つてゐる。

「祭司長、學者等、イエスの爲し給へる不思議なる業と、宮にて呼はり『ダビデの子ホザナ』と言ひをる子等とを見、憤りてイエスに言ふ『なんぢ彼等の言ふところを聞くか』イエス言ひ給ふ、『然り、嬰兒、乳兒の口に讃美を備へ給へり、とあるを未だ讀まぬか』(マタイ傳廿一章十六)』

「オリブ山の下りあたりまで近づき來り給へば、群れゐる弟子等みな喜びて、その見どころの能力ある御業につき、聲高らかに神を讃美して言ひ始む、『讃むべきかな、主の名によりて來る王。天には平和、至高き處には榮光あれ』、群衆のうち或るバリサイ人ら、イエスに言ふ『師よ、なんぢの弟子たちを禁めよ』答へて言ひ給ふ『われ汝らに告ぐ、此のともがら黙さば、石叫ぶべし』(ルカ傳十九章三七—四〇)』

如何によく教會に出席しても、長い祈をしても、眞の悔改のない者は主イエスを

讃美することが出來ない。これに反して眞に自分の罪に泣き、その救を知つたものは、誰が止めても、主を讃美せずにはおれないのである。主イエス御在世當時も、主を迎へて心より讃美した人々は、世間の嫌はれ者、取税人や、賣笑婦や、病人や、無學の田舎者であつた。何故であるか、それは彼等の罪や病そのものゝためではない、それ等自身は神に近づけるよりか寧ろ遠ざけるものである。されどその罪、その病のために、自己の誇が全く打碎かれ、自己の無價値と、憐さを知つて、主イエスに信頼せずにはゐられなくなつて、はぢめてこの讃美が與へられるのである。神を讃美することの出來るのはこの碎かれた靈魂である。この貧しき心である。

或る時主イエスが、十人の癲病人に遇はれた。癲病人は何處の國でも最も嫌はれる病人であるが、このユダヤの國では特に嫌はれて、癲病になると神の詛を受けたものとして町より追放されてゐたのである。同病相憐むと、彼等は彼等同志扶けあふより他仕方のない全く淋しい人々であつた。彼等もかつては楽しい家庭に生活した事もあ

つた。色々理想を夢みた事もあつた。然るに今はこの病の故のみに、家族にも世間にも棄てられ、犬にも劣る生活をなさねばならないのである。救ひ主が此の世に來り給ふならば、彼等も第一に救はれねばならない人々であつた。十人の癩病人は主イエスを見たとき、此の方こそは自分達をいやして下さるのではないかと思つて馳せ寄りたく思つたであらうが、律法はかゝる病人が普通の人に近づく事を禁じてゐる。(レビ記十三章 四十五) やむを得ず彼等は遙に立ち止まり、聲を揚げて「君イエスよ、我らを憐みたまへ」と叫んだ。

當時の人々特に宗教家達は、かゝる癩病人に口をきく所か顔を向けても身が穢れるとして、彼等を避け、或は石を打ちつけたと云ふことであるが、主イエスはいつもこの様な氣の毒な人を見ると同情に堪へられなかつた。主は病人を癒す事を目的として此の世に來られたのではない。又病人を癒すことによつてこの宗教を擴めんとするやうな考へは毛頭なかつた。かへつて病人を癒す事を人々が云ひ觸らすことを止め給う

た程である。されど彼は神の子として、病を癒す力をも持ち給ふ方として、かゝる病人に接せられた時、同情のあまり手を伸べて、兄弟よとその癒を祈らすにはおれなかつた。この時も主は彼等を憐みて「なんぢら往きて身を祭司らに見せよ」と云ひ給うた。即ち癒すから律法に従つてその癒えた事を祭司に認定してもらへと云はれたのである。彼らは往く間に長らく彼等を苦しめてゐた癩病は跡かたもなく潔められた。所がその十人の中たゞ一人のサマリア人は、あまりの嬉しさに「大聲に神を崇めつゝ歸りきたり、イエスの足下に平伏して謝した。」何故他の九人は平然として己が道に行つたのにこの一人のみが神を讚美しつゝ歸つてきたのであらうか。多分この一人はサマリア人であるので、彼等は他の九人のユダヤ人の中にあつても、かたみせまく思つてゐたのであらう。當時ユダヤ人とサマリア人は交りしてゐなかつたため、病人同志は憐んで交つてゐたとは云へ、今ユダヤ人であるイエスの前に立つた時、他の九人は同國人であるイエスより癒さるゝとしても自分だけは残されるかも知れない。又若

し癒さるゝとしても、自分は最後にいやさるべきものであつて、他の九人の餘慶に與る資格しかないと思つてゐたのであらう。ところがその彼が癒されたのだから嬉しくてたまらない。何の區別もなくこの異國人をも憐み給ふ方は如何なる方かと、彼は自己を忘れて主を見上げた。ところが他の九人は同じく癒されつゝも、全く自己を離れきらなかつた。俺は今から一人前の仕事が出来、俺の妻子は悦ぶだらう、親兄弟も悦ぶだらう。あくまで俺中心である。かゝる人は昔も今も變りなく澤山ゐる。苦難にある時のみ、主よ〜と祈るが、それより解放されることもう信仰などは忘れて仕舞ふ主イエスは彼の所に歸つてきたこのサマリヤ人を見て云ひ給うた。「十人みな潔められしにあらずや、九人は何處に在るか。この他國人のほかは、神に榮光を歸せんとして歸りきたる者なきか」と。さうしてこの一人を顧みて「起ちて往け、なんちの信仰なんちを救へり」と。彼は肉體が潔められたのみでなく、その靈の救をも約束されたのである。實に彼は幸なる者である。肉體の病がもとなつて靈の救にまで到る事が出

來たのである。

我等靜かに省みると、たとへこの肉體は健康であつても、その靈は癩病以上に腐つてゐる。「義人なし一人だになし」絶対正義の神の前に立つ時、眞面目なものは、誰しも自己の醜い姿に泣かずには居れない筈である。彼等のは肉體であるが、我等のは永遠の滅亡に到る靈である。この靈は主イエスの十字架の血潮によりてのみ潔められ贖はれる。聖靈によりてこの事が示されて、始めて神を讚美せしめられるのである。

「アーメン、讚美、榮光、智慧、感謝、尊貴、能力、勢威、世々限りなく我らの神にあれアーメン」(黙示録七・一二)

「生ける限りはエホバに向ひて歌ひ、我存ふるほどは我が神をほめまつらん、エホバを思ふわが思念は歡樂ふかゝらん、われエホバによりて喜ぶべし」(詩一〇四)

第八章 主イエスとザアカイ (ルカ傳十九章一―十)

—それ人の子の來れるは失せたる者を尋ねて救はん爲なり—

五二

主イエスは此の世に於ける傳道生涯を、十字架の上に完成すべく、愈々最後の都上りへと旅立ち給うた。

ユダヤの國の東の國境近くにエリコと云ふ町がある。この町はユダヤの東の門戸であつて、凡ての物貨はこの町の税關を通つて輸出入されてゐた。その税關の長にザアカイといふ人があつた。彼は主イエスが此の町を通り給ふ事を聞いて、何故か心の底にわく／＼するものを感じずにおれなかつた。彼はこの歳になるまで、神の事信仰の事はあまり考へなかつた。たゞ金さへ得ればそれでよいやうに思ひ致々として金を蓄へる事に没頭して、今日「富める人なり」と人々より云はれる程の財をなしたのである。併し靜かに考へてみると何と空しい過去の生活であつたであらうか。彼は寄る歳

波にもう餘命の幾らもない事を考へずにはゐられなかつた。何時此の世に終を告げねばならないかわからない。その時において今まで蓄へた財産がいつたい何になるだらうか。幾十年かゝつて得た今の地位が何になるだらうか。彼は出来るならばこの人生を初めからやりなほしたいと考へたであらう。どんなに貧乏しても、永遠に朽ちないものゝために一生を送りたかつたかと考へたであらう。その時主イエスがこの町を通り給ふといふことを聞いた。

彼は今までも幾度か主イエスの噂を聞いてゐた。どんな罪人でも悔改めれば赦して下さる事をきいた。又彼と同じ職業に従事してゐたマタイが主の弟子になつた事等多分聞いてゐたであらう。さうして主が愈々エリコに來られた時、彼は如何にもして一目なりともその主を見たいと願つたのである。されど彼がその道に行つた時には、既に人が多くて丈の低い彼には主をみるによい場所がなかつた。もう主はすぐ前まで來てゐられる。彼は何もかも忘れて傍にあつた桑の木に登つた。(日本の桑の木より

五三

も丈高く、無花果に似た實になる。この地方では道の傍に多く植ゑてゐた。彼は人々から罪人として排斥の的になつてゐる事も、矮少な老人が木登りする不恰好も、考へる隙なく、たゞ主を見たいとの熱心にかられてかくなしたのである。それを見た人々は「おゝ鬼ザアカイが今日はどうかしてゐるぞ」「ちびザアカイのさまは何だ」と嘲笑つたであらう。

そこへ通り懸り給うた主は何事かと上を仰がれると、その木の上にはザアカイが登つてゐる。彼は人々の嘲笑などは耳に入らぬらしく熱心に主をみつめてゐる。涙さへその两眼には宿されてゐる。あゝこの方だ、この方だ、私をもう一度新しく生れ變らして下さるのはど、彼は心に叫んでゐたのである。主にはこのザアカイのきもちがよくわかつた。道の兩側に垣を造つて彼を迎へてゐる誰よりも、彼はこのザアカイに目を留め給うた。「ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし」何といふ有難い言葉であらうか。

私はこゝより深い教訓を受けるものである。主は如何なる罪人よりも下にありて上を仰ぎつゝ急ぎ下りよと云ひ給ふのである。此處まで上つて来いさうすれば救はうと云はれるのでない。私ども人間は色々な形においての誇を感じて高く上りたがるものである。或人はその地位、力、學識を誇る。又或人は信仰、聖靈、異言を誇る。又或人々は自分が罪人であり悪人である事をさへ誇る。これらの誇はたゞ如何なるものであつても、我等を主より遠ざけるものである。彼等は廣告の輕氣球のやうに高い所でフワリ／＼と自己宣傳をやつてゐるが、主は遙か／＼下にありて彼等のために十字架を負ひつゝ歎き給ふのである。主の十字架は全くゼロの所にある。全く自己にゼロになつて初めてこの十字架が私どものものとなる。十字架は天國に立てられたのではない、地獄の底に立てられたのである。天使のためにたてられたのではない、全く望なき罪人のために立てられたのである。「急ぎ下りよ」と主は我等の下に立ちて呼んでゐられるのである。

ザアカイはこの主のみ言を如何に喜をもつてきいたであらうか。一目みたいと思つてゐたのにそれどころでなく自分の家に、然りこの罪人の家に宿るとおほせられる。ところが驚いたのは群集である。「人々みな之を見て泣きて言ふ『かれは罪人の家に入りて客となれり』」と。自己の罪とキリストの愛のわからぬ人々はこゝでも亦泣いてゐる。宛も自分達には少しの罪もないかの如くに。ザアカイはその言葉をきき、決心の色を顔にあらはし、決然と立ちて主に云ふ『主よ、視よ、わが所有の半を貧しき者に施さん、若しわれ誣ひ訴へて人より取りたる所あらば、四倍にして償はん』と。彼の心の大變革があらはれてゐる。今まで金を何よりも愛してゐた彼が、今は惜しみもなく投げ出さうといふのである。又もし不義な金をとつてゐたとすれば、律法に従つて（出エチプト廿二章一）それを返さうといふのである。心の底よりの悔改なくては發し得られぬ言葉である。主はそのなさんといふ行爲よりも、その心を喜び給うた。故に「けふ救はこの家に來れり、此の人もアブラハムの子なればなり」と云ひ給うた。

ザアカイの信仰の故に、救は一家全體に來たと云はれるのである。又彼が如何に墮落してゐても矢張彼も、アブラハムの子孫であつて、神に救はるべき約束の民であると云はれるのである。さうして主は更に言葉をつゞけて、自分の此の世に來たのは「失せたる者を尋ねて救はん爲なり」と云はれた。實に有難い事である。主はかつて、一匹の失せたる羊を見出すために九十九匹を野に置いてさがす羊飼の譬を語り、又十枚の銀貨の中、僅か一枚失つても全力をあげて見出さんとする女の譬を語り給うたが、主イエス御自身こそは神より離れた一人を連れ歸るために全力を盡されるのである。たとへ唯一人の外、全人類のすべてが、キリストの贖なくして救はるゝとしても、主はなほその例外の一人のために十字架にかゝりて贖をなし給うのである。「斯の如く悔改むる一人の罪人のためには、神の使たちの前に歡喜あるべし」（ルカ傳十五ノ十）たゞ一人の罪人の悔改にも天國は歡喜に轟くのである。悔改めた一人の罪人は、悔改めぬ百の義人よりも尊いのである。あゝ實に尊いかな一人の罪人の價、それ自身は何

の価値なきものに拘らず主はかくも高價な価値を與へ給ふのである。

「我もろくの民のなかにて汝に感謝し、もろくの國のなかにて汝を讃め歌はん、汝の憐みは大にして、天の上にあがり、なんぢの眞實は雲にまでおよぶ」(詩百八篇・三、四)

第九章 主イエスと死刑囚 (ルカ傳二三・三二―四三)

——今日なんぢは我と偕にパラダイスに在るべし——

春も漸く深からんとして、橄欖山の橄欖に少しづゝ小さな白い花が咲き初めた頃、ゴルゴタの丘の上に三つの十字架が立てられた、その形はどれも同じ様で少し距つて眺むると、それが誰の十字架かさへわからない。たゞ三人の犯罪者が今日も刑に處せられた位にしか思はれなかつたであらう。されどこの三つの十字架程、それ／＼大なる相違せる意味をもつて立てられたものは、未だ曾て人類の史上には無かつた。

その中央は云ふまでもなく全人類の罪の贖のために立てられた主の十字架である。その十字架を挟んで兩方に立てられたものは誰人の十字架で如何なる意味をもつのであるか。或學者は云ふ「この二人は共謀して主人のものを誤魔化して云々」と。又或る人は云ふ「彼等は國事犯で大なる陰謀云々」と。併し私にはそんな想像はさうでもない。たゞ彼等が十字架といふ極刑に處せられるだけの罪人であつた事だけで十分である。

主の十字架を挟んで右と左に立てられたこの二人の十字架、これこそは全人類を二分してその代表として立てられた十字架である。

私は今この三つの十字架の上に於て、迫りくる死を前に、交された會話を聞かう。「十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言ふ、なんぢはキリストならずや、己と我らとを救へ」自らキリスト(救主)だと云つてゐたではないか、それなら俺達を今救つて呉れてはどうか、いや自分自身さへ救ひ得ないではないか。と一方の

十字架の罪人は主の十字架を顧て嘲つてゐる。この言葉はいかに痛く主の胸に響いた事であらうか。併しそれは自ら嘲られたからではない。「侮られて人に棄てられ悲哀の人にして……」とは數百年前彼について預言されてゐる所であり、彼もその爲に此の世に來り給うたのである。先程も十字架を負ひつゝ歩み給ふ主のみ姿の痛ましさに泣く婦人たちを顧て「エルサレムの娘よ、わが爲に泣くな、ただ己が爲、己が子の爲に泣け」と云はれたのである。今更自己について何を悲まう。あゝされど今救か亡びかの瀬戸際にあつて、その救のために、然り彼の救のために立てられた十字架が一間と離れぬ所にありながら、これを拒み嘲りつゝ亡びゆくものゝ憐れさよ。主の心はその爲に痛み云ふべき言葉さへなかつた。

然るにその時思ひがけなくも、他方の十字架の罪人が言葉を發した。「他の者これに答へ戒めて言ふ、汝同じく罪に定められながら神を畏れぬか、我らは爲しゝ事の報を受くるなれば當然なり。然れど此の人は何の不善をも爲さざりき」彼は自己の犯し

た罪の恐ろしさを考へながら、この刑罰を當然の事と觀念の眼を閉ぢてゐたのであるが、仲間の暴言を聞き兼ねて之を戒め、靜かに同情をもつて主を仰いだのである。ところが同情した彼が、かへつて主から同情をもつて眺められてゐることを知つた。優しい主の御まなざし、憐みにみちた御顔つき。彼がもし手足の自由がきくならば泣きくづれて主の十字架のみ下に跪いた事であらう。おゝこの方こそは、この十字架こそは我等罪人のために、滅亡より他に行き所のないものゝために。この札附の惡黨として世から棄てられた私のために……。あゝ如何に恐ろしい罪を犯した事であるか。その罪をことごとく無條件に赦して頂くとは……。

亡ぶる者には馬鹿々々しく見ゆるこの十字架が、主の直弟子にさへまだ解りかねてゐたこの十字架が、臨終の際にあるこの罪人に、言葉以外の言葉をもつてわからされたのである。あゝ彼は何といふ幸な日にめぐりあはせた事であらう。今まで罪の報として負うてゐた重い恥辱の十字架が、急に軽い光榮の十字架に變つた。主と偕に十字

架を負ふものゝ幸。すべての重荷と罪の誼は主が引き受けて下さつて、十字架の勝利と祝福のみを與へて下さるのである。

彼は思ひ切つて叫んだ「イエスよ、御國に入り給ふとき、我を憶えたまへ」と。主イエスは静かに答へ給うた「われ誠に汝に告ぐ、今日なんちは我と偕にパラダイスに在るべし」と。「我と偕に」と主は云ひ給ふ。有難いことである。主と偕にあることそれ自身が天國である。たとへ地獄の底であつても、死の蔭の谷であつても、主がゐるまゝ給ふ所そこが天國でありパラダイスである。

誰かゞ人間は生れながらにして死刑囚だと云つた。慥かにさうである。死刑執行までに僅かの時間の相違はあつても、結局我等は死ぬべきものである。この二人の罪人に我等何の變る所はない。我らも「同じく罪に定められてゐる」。それでゐてなほ我等の贖のために立てられた主の十字架を嘲らんとするのか。或は我は罪人なりと主のみ前にすべてを投げ出して跪かんとするのか。この二人の同罪の死刑囚が、主の十字

架に信賴するか、叛逆するかによつて、永遠の運命を異にした如く、全世界の全人類は、この我等の間に立てられた主イエスの十字架に對する態度如何によつて、永遠の運命が決定されるのである。

主イエスの十字架と、それを挟んで立つ二つの十字架、信賴の十字架と、叛逆の十字架、これらの三つの十字架は決して二千年前にカルバリの丘に立てられたのみでなく、此の地球上に此の世の終りまで永遠に鼎立する三つの十字架である。

第十章 主イエスと人類

——キリスト我等のために誼はるゝ者となりて
律法の誼より我等を贖ひ出し給へり——

我等人間に罪のある事は誰しも認めずにおけない事實である。このことだけは如何なる哲學者も、科學者も、宗教家も、少なくとも眞面目な人であるならば、誰しも肯

定しない者はない筈である。聖書にある罪といふ意味は元來的もとよりを外れると云ふことであつて、人間として歩むべき道を歩まず、なすべき事をなさないのを云ふのである。人を愛すべき筈にこれを憎み、少しの偽もない筈なのに虚偽を装ひ、正善を爲し又考へるべき筈なのにそれに悖りて邪念邪想に陥る。これ悉く罪である。この意味に於て世界全人類、その創造の始めより世の終りまで、誰一人罪を犯さない者はない。聖人君子もことごとく罪人である。否彼等程かへつて深刻に罪に悩んでゐる。孔子然り、ソクラテス然り、釋迦然りである。

されば誰でも罪人であるから、我等も罪人であつてもよいのであるか。かく考へること程大なる誤はない。我等の中に罪のあるのが事實であるやうに、又我等には罪をにくみ、正しくあらんとする良心のあるのも事實である。良心の鋭い人程この罪を問題にして悩まずにはゐられない。又、一方どんなに墮落し、自ら悪魔をもつて任じ酒を飲んで誤魔化さんとしてゐる者でも、なほこの良心を全部失つてしまふ事は出来な

い。この我等の中に良心のあることは、此の世に絶対正義の神のある證據であり、又我等が此の神に創造せられた證據である。我等の良心は神より離れて本來の力を失つてはゐるが、なほ罪を悩み、義を愛することの出来るのは、これが神より與へられたものであるからである。たとへ我等の良心は鈍り又曇ることがあつても、この本源の神の義は絶対に不變である。

絶対正義の神と人類の罪、これは永遠に相容れないものである。絶対正義の神が此世に存在する以上、我等の罪は滅亡されずにはおかれぬ。神は罪を憎み給ふ。極度にこれを誼ひ、又これに仕へる人類を罰せずには置き給はない。「それ神の怒は不義をもて眞理を阻む人の、もろくの不度と不義とに對ひて天より顯る」(ローマの二八)こゝに神の神たる所以があり、義の本源たる所以がある。我等は人はみな罪人だからといつて罪に安んじてはおれない。實に罪はその大小如何に拘らず我等を滅亡に到らしむるものである。神が義であり給ふ以上、その神が永遠に存在し給ふ以上、罪の存

在は一點一影をも許されない時がくる。

されば我等は如何にしてこの罪の支配より逃れる事が出来るか。これ大なる問題である。正義の神の存在を知らば知るほど我等はこの問題に悩まずにおれない。併し我等の罪は我等の靈の奥底にまで喰入つてゐる。悪い習慣とか、性格の問題なら修養訓練によつて改める事も出来るであらうが、罪とはもつと根本的な問題である。さうして我等にはこの罪より逃れる力さへも無くなつてゐる。我等生れながらにして既にこの罪の捕虜になつて居る。この我等には嚴肅なる神の律法は、死刑を宣告する檢事の論告どしか聞えない。「我はわが中、すなはち我が肉のうちに善の宿らぬを知る。善を欲することわれにあれど、之を行ふ事なければなり。わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の惡は之をなすなり。……われ中なる人にては神の律法を悦べど、わが肢體のうちに他の法ありて我が心の法と戦ひ、我を肢體の中にある罪の法の下に虜とするを見る。噫われ惱める人なるかな、此の死の體より我を救はん者は誰

ぞ」(ロマ書七章一八―二四)これは又私どもの呻である。昔、この地方では最も酷い死刑の方法として、十字架の上で死體と結び合せ、その死體よりくる毒素によつて最も苦しい死を與へたさうであるが、我等の罪はこの亡びに到らしむる死體として我等に結びついてゐる。罪の價は滅亡である。あゝ我惱める人なるかな、この死の體より我を救はん者は誰ぞ。

我等自身この罪を處分する力がないとするならば、我等はたゞ神御自身に處分して頂くより他に途はない。神の罪を處分し給ふ方法としては、その罪の責任をこれに仕ふる人類に負はし、罪と人類とを滅亡に處分し給ふのが至當である。これ最後の審判に於てごり給ふ方法である。かくされても我等一言も神に抗辯する事は出来ない。併し神には人間に對するやみ難い愛がある。人間を悉く滅亡に到らしむる事を忍び給はない。茲に神は特別な方法として神御自身罪の責任を負ひ、罪のみ處分して人を救ふ方法をとられた。この爲に御子キリストを此の世に送り罪人なる全人類に代りて十字

架につけ給うたのである。「神は忍耐をもて過ぎ來しかたの罪を見遁し給ひしが、己の義を顯さんとてキリストを立て、その血によりて信仰によれる宥の供物となし給へり、これ今おのれの義を顯して、自ら義たらん爲、またイエスを信する者を義とし給はん爲なり」神は長い間人の罪を見遁し給うた。幾度か預言者を送つて警告しつゝ人類の悔改を待ち給うた。併しついに時が來た。神は自ら義であることを示し又信する者を義とするために、御子キリストを宥の供物として十字架につけ給うたのである。

實に主の十字架は神の義の現れである。罪に對する神の極度の詛ひが現れてゐる。主は十字架の上に「我が神、我が神何ぞ我を棄て給うや」と云ひ給うた。主は十字架上に於て神に棄てられ給うたのである。神の詛を受け給うたのである。私どもの受くべき罪の詛、罪の罰を受け給うたのである。これ實に神の義の現れである。主が十字架にかく苦しみ給うたのは、十字架といふ極刑の苦しみではない。それなら平然と斷頭臺の露と消えた無神論者の方が餘程勇氣がある。主がかく苦しみ給うたのは、未

だ誰も人間のうかがひ知らない全人類に對する神の詛を受け給うたからである。神の獨子として全然罪の無い主が罪の詛を受け給ふ、これにまさる痛みはない。神と偕に天地が未だ創造されざる太初はじりよりありて、神のみ心によりてのみ動き給うた主が、今神に棄てられ給ふ、これにまさる悲しみはない。我等人間の曇つた良心さへ罪を惱む、まして義そのもの一點の不正なき主が、罪人とされ給うたのである。我等人間の愛さへ、愛するものとの別離を悲しむ、まして完き愛そのものとして神と一體である主が神に棄てられ給うたのである。未だ天地創造以來かゝる悲劇はなかつた。天地もその爲に哭し、日月もそのために運行をどゞめたであらう。

かくて罪人が神に歸る途が開かれた。基督は人類に代りて十字架に死してまた復活し給うた。死を征服して御國に凱旋し給うた。「キリストは肉體にて在し、とき、大なる叫と涙をもて、己を死より救ひ得る者に祈と願とを獻げ、その恭敬かうやうしきによりて聽かれ給へり。彼は御子なれども、受けし所の苦難によりて従順を學び、かつ全うせ

られたれば、凡て己に順ふ者のために永遠の救の原となりて、神よりメルキゼデクの位に等しき大祭司と稱へられ給へり」(ヘブル書五章七—十) 基督が罪人になし給うた救の約束はこゝに完成された。かくて主御自身我等のために執成し給ふ。この主であつてこそ初めて罪の赦を約束する事が出来たのである。姦淫せる女の石で打殺さるべき罪も、ザアカイの貪つた罪も、その他主を信するすべての罪人の罪が、悉くこの十字架の上に處分されてゐるのである。かくて、我等はこの主を受入れる事によつてのみ、「たゞ此のまゝにて」神の子とされて永遠の生命の御國に招かれるのである。そして神の最後の審判は、主を信する者にとつては滅亡の時ではなく救の完成の時となつたのである。

x x x x x

世の基督教を信すると稱する友等よ、我等は今一度靜かに反省してみようではないか。我等の信仰が、眞實にキリストのこの十字架を根本としてゐるか否かを。我等は

何々教會に屬するとか、何々研究會に屬するとか、何々の學說や、主義に共鳴するとか、何々の慈善事業や社會事業をなすとか、救の條件となるのではない。口に福音を叫び十字架を唱へつゝ何かそこに空虚なものがありはしないか。十字架を教會堂の屋根の上に祭り上げてしまつて、信仰生活とは何等關係のないものとなしてしまつてゐるのではないか。十字架を信仰の裝飾としてゐるのではないか。十字架は裝飾ではない。我等の罪に對する嚴肅なる神の詛と我等に代りて主イエスを詛ひ給うた神の愛のあらはれである。神の義と神の愛、この故にのみ我等救はれる。こゝにのみ生命と力と感謝がある。この十字架の前に自己のすべてを捧げて跪いてゐるのか、或は十字架を信仰の一部の飾としてゐるのか。今一度眞面目に反省せねばならない。

又基督を信せずとも正しくありさへすればよいと云ふ友等よ、誤魔化してはならない。君は眞實に正しくあり得るのか。君等の力で築き上げたものが神の前に何であらう、他の人に比較して修養が積んだとか、愛があるとか自惚れてはならない。絶對正

義の神の審判に於て、それが一たい何になるであらう。人間の努力で地上に築き上げたものは悉くバベルの塔にすぎない。根本より破壊される時がくる。たゞ基督による信仰のみ神の前に義とされるのである。

更に又此の世の快樂のみを追ひ求めてゐる友等よ、神を侮つてはならない。君のうちに囁く神の聲が聞えるだらう。いくら聞えないふりをしても駄目だ。どうだ快樂を追つて果して喜びがあるか。平安があるか。そんなもので満足されない所にまだ人間の尊さがある。我等人間は神にまで歸らねば到底眞の平安は得られないのだ。罪を恐れよ。さうして基督による贖の恵を受けよ。然らざれば我等、罪もろともに永遠の滅亡に處分されるのみである。

更に又病に苦しみ、不遇に悲しむ友等よ。我等に與へられた鞭は痛い。幾度かその下に再び起ち上ることが出来ないかと思はれる程打ちのめされる。あゝされどその鞭も主の許なくては下らない。たゞへそれが悪魔の鞭であつても、その痛みと涙の中よ

り主に絶がらう。基督を信じて逆境にあるは、基督を信せずして順境にあるに遙に優る。「たゞひわれ死のかげの谷を歩むとも禍を恐れじ」「涙の谷をすぐれども其處をおほくの泉あるところとなす」主と偕なれば如何なる苦難も突破出来る。その重荷はすべて主が負つて下さる。

最後に、自己の罪に泣く弱き友等よ。今日その罪を犯すまでには種々なる事情があつたであらう。併しそれを咄くまい。神はすべてを知つてゐて下さる。「我らの大祭司は我等の弱きを思ひ遣ふこと能はぬ者にあらず」「我らは憐みを受けん爲、また機に合ふ助となる恵を得んがために、憚らずして恵の御座に来るべし」主はこの弱き罪人を救はんがために來り給うたのである。我等自己の無力と罪人なるを知つた事は何よりの幸である。たゞ主に絶がらう。これならどんな無力なものにも出来る。否弱きものにもみ與へられた唯一の特權である。主は我等に必要なすべてのものを與へて下さる。信仰する力も。善をなす力も。

おゝ此の世界に生を享けてゐるすべての友等よ。凡ての罪人よ。基督のこの福音を
信せよ。やがて主は再び來り給ふ。此の世は去りて新天新地は來る。神を我等の父と
して親しく仰ぐ時が來る。今、人知れず泣いてゐるその涙も悉く拭はれる時が來る。
「視よ、神の幕屋人と偕にあり。神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みづか
ら人と偕に在して、かれらの目の涙をことごとく拭ひ去り給はん。今より後死もな
く、悲歎も號叫さけびも、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり」

(ヨハネ黙示録二十一章三節四節)

主イエスと罪人たち終

昭和九年一月三十日 印刷
昭和九年二月五日 發行

定價 金二十五錢
送料 四錢

不許複製

著者兼發行者 藤本正高
印刷者 名古屋市東區千種町馬走二八番地 小島保太郎

發行所

東京市杉並區阿佐ヶ谷二丁目五九番地 阿佐ヶ谷聖書研究會
振替東京四三六四七番

賣捌所

東京市麴町區九段坂 向山堂書房
振替東京六二七三二番
東京市淀橋區百人町二ノ二五番 獨立堂書房
振替東京一九四六八番

W・G・ブレイク原著
畔上賢造
藤本正高 共譯

リビングストンの生涯

近刊(三月中旬發行)
四六版三百數十頁
定價未定

暗黒の大陸、アフリカの土人に基督の福音を傳へるためにすべてのものを捧げ、ついにはその妻子までも失ひ、最後に己自身も大陸の真中に倒れたリビングストンの傳記である。而も彼は「我等のためにキリストが十字架にかかり給うたを思へば、我等のなす事を何で犠牲と云ひ得るか」と云つてゐる。
かつてアース大將はこのアフリカにもまして暗黒なのは大英國であると云つた。併し靈的最暗黒は決して英國のみではない。我等はこの世界的暗黒の中にあつて、今一度リビングストンに學んで立上らねばならないと信するものである。

發行所 東京市麹町區九段坂
振替東京六二七三二番
向山堂書房
受次 東京市杉並區阿佐ヶ谷三ノ五九
振替東京四三六四七番
阿佐ヶ谷聖書研究會

塚本虎二著

結婚と信仰

四六版一六〇頁
定價一圓八錢
送料八錢

結婚問題は現代日本の若人の悩みである。殊に信仰と結婚との諧調は眞面目なるクリスチャンの生涯に於ける最大難關の一つである。多くの若き人々がこれに躓いてその尊い生涯に深傷を負うた。本書は基督教に於ける結婚の意義を明にしてこの難關に逢着せる若き人々に正しき理解と暗示とを與へんとするものである。

葛巻星淵 著

噫内村鑑三先生

菊半蔵三十三頁
定價金三十五錢
送料金四錢

東京市淀橋區百人町二ノ二五四
發行所 獨立堂書房
振替東京一九四六八番

畔上賢造著

ガラテヤ書註解

四六版四百三十一頁
定價一圓八十錢
送料十錢

基督教の根本的生命について簡潔にして有力なる説明を與へしガラテヤ書は、聖書中においても古來人々の最も愛讀した書である。殊にプロテスタント的信仰の堅城として人々が獨立と自由を護らんとする戰に於て唯一のたよりとしたのは此書である。註解者は出来るだけ密に一字一句の意味を説明しながら、各章の趣意を明らかにせんと努力した。讀者は之により福音の中心を明らかにするを得るであらう。

伊藤祐之 著

マルクスよりイエスへの歩み

定價一圓十錢
送料拾錢

東京市麴町區九段坂
發行所 向山堂書房
振替東京六二七三二番

畔上賢造主筆（毎月一日發行）

日本聖書雜誌

一冊三十錢半年壹圓六
十五錢一年參圓廿錢海
外三圓七十錢

聖書の基督教を説くを主眼とす。毎號菊版四十八
頁に聖書の眞理を滿載す。純獨立の立場より日本
的基督教を唱導し、日本民族の宗教を高調す。熱
心なる讀者を日本各地及海外に有す。
藤本云ふ——私も本誌に毎月寄稿することになつ
て居ります。知人諸氏の購讀を奨めます。

東京市澁橋區上落合一ノ四四七

發行 日本聖書雜誌社

振替東京二五一四九番

受次 阿佐ヶ谷聖書研究會

振替東京四三六四七番

○見本希望者は郵券十錢送られたし

阿佐ヶ谷聖書研究會

現代すべての教派を離れ獨立自由の立場にあ
りて基督の福音を學ぶ集會

一、日時 毎日曜 午后七時（開會）

一、講師 藤本正高（毎回）
畔上賢造（當分第
二日曜）

一、場所 東京市杉並區阿佐ヶ谷二丁
目五九九番地（省線阿佐ヶ谷
下車約三分）

一、聽講料 自由献金

（何人にてても聽講し得、但し眞面目なる態度を求む）
（舊新約聖書、讚美歌持参のこと）

終

